幼児の空想の友達と社会的発達

本島優子¹・森口佑介¹・遠藤利彦²

(¹上越教育大学学校教育学部・²東京大学大学院教育学研究科)

キーワード：空想の友達・社会的発達・縦断的検討

Social development of preschool children with imaginary companions

Yuko MOTOSHIMA¹, Yusuke MORIGUCHI¹ and Toshihiko ENDO²

(¹Department of School Education, Joetsu University of Education, ²Graduate School of Education, University of Tokyo)

Key Words: imaginary companions, theory of mind, a longitudinal study

目 的

子どもはしばしば、その遊びの中に架空の人物や生き物を登場させ、それらとの間で実にリアルな相互作用を展開する。こうした架空の対象は「空想の友達 (Imaginary Companion)」と呼ばれ、これまでも発達心理学の中で相応の関心を払われてきたが、その取り上げられ方は、ふり遊びやごっこ遊びの一種あるいは亜型としてのものであった。しかし、この空想の友達には単なるふりなどには留まらない種々の興味深い発達の要素が絡むと考えられ (Gleason et al., 2000)、空想の友達を有することの発達の意義について実証的に探ることは非常に重要で大きな意味があると思われる。実際に、空想の友達を有する子どもの発達的特徴として、社会的能力の高さが報告されている。たとえば、空想の友達を持つ子どもは、ポジティブな情動性が高く攻撃性が低く (Singer & Singer, 1992)、他者の心の理解が優れていた (Taylor & Carlson, 1997)、またコミュニケーション能力が高い (Roby & Kidd, 2008) ことなどが指摘されている。しかし、これらの研究は、その多くが発達の一時点でのデータ収集に基づく研究であり、縦断的視点から子どもの空想の友達の発現とそれが子どもの発達に持ち得る効果を検討した研究は極めて少ない。そこで本研究では、子どもの空想の友達の発現が後の子どもの発達にどのような影響を持つのか、縦断的手法による実証的検討を行うこととする。より具体的には、3歳半における子どもの空想の友達の有無が6歳における子どもの社会的発達—他者の心の理解、感情理解、問題行動とどのように関連するのか、縦断的データを用いて検討を行うことを目的とする。

方 法

協力者 子どもの発達に関する長期縦断研究に参加している関西・北陸地区在住の母子約40組を対象とした。

手続き **Time 1 (3歳半)**: 子どもの空想の友達に関する質問紙を各家庭に郵送し、母親に回答を求めた。回答後、郵送で返信してもらった。

Time 2 (6歳): 各家庭を訪問し、子どもに心の理論課題、情動理解課題の実験を行った。また、子どもの問題行動について母親に質問紙での回答を求めた。

測度 ①**空想の友達** 子どもの空想の友達の有無について、遠藤 (2001) の質問紙を用いて母親に報告を求めた。質問紙では、特に具体的な見立ての対象を持たない invisible friends とぬいぐるみや人形等の具体的な見立ての対象を有する personified object に関して、具体的なエピソードを例示しながら、エピソード例のような友達が子どもにどうか、最初に尋ねた。もし当てはまる場合、その友達の性別、年齢、外見、性格、登場する場面、子どもとの関わり方などについて詳細を尋ねた。

②**心の理解 (誤信念課題)** 他者の信念の理解について、Wellman & Liu (2004) を参考に実験を行った。お菓子の箱

の中にボールペンが入っていることを知らない登場人物がお菓子の箱を見て中に何が入っていると思うか、鉛筆 (本当は机の引き出しの中にある) が鞆の中にあると思っている登場人物はどこの場所を探すと思うかなど、動物の人形を使って実演しながら、子どもに回答を求めた。4試行実施し、正答1点、誤答0点として合計得点を算出した。

③**感情 (表出) 理解** ある状況や場面における人の感情の理解および感情の表出ルールを理解について Jones et al. (1998) を参考に実験を行った。情動を喚起するような場面のストーリー (例: 友達の前で転んでしまったが泣き虫と思われたくなかった) を子どもに読み聞かせ、そこでの登場人物の感情と表出すべき感情について、喜び・怒り・悲しみ・普通の表情絵カードから1枚選んで回答してもらった。6試行実施し、正答1点、誤答0点として合計得点を算出した。

④**問題行動** 子どもの情緒と行動の問題について Achenbach (1991) の Child Behavior Checklist (CBCL) の日本語版 (井潤他, 2001) を用いて、母親に評定を求めた。112項目に関して、0:「当てはまらない」～2:「当てはまる」で回答を求めた。

結 果

子どもの空想の友達の基礎的データ

3歳半における子どもの空想の友達の発現率 ($N=37$) は personified objects が 43%、invisible friends が 8% であった。目に見えない想像上の友達を持つ子どもは少数であったため ($N=3$)、以下 personified objects と invisible friends を区別せず、両者をまとめて空想の友達有り群として分析を行った。空想の友達の数は、1人が 37%、2人が 19%、3人以上が 48% であった。空想の友達が現れた時期は、2歳前が 21%、2歳から3歳の間が 63%、3歳以降が 16% であった。空想の友達の性別は、子どもと同性が 50%、異性が 17%、不明が 28% であった。空想の友達の年齢は、子どもよりも年下が 61%、子どもと同年齢が 22%、不明が 17% であった。大部分の子どもにおいて (78%)、空想の友達ともしっかり関わりが多かった場面は遊び場面であった。

空想の友達を持つ子どもの社会的発達

3歳半における子どもの空想の友達の有無が6歳における子どもの社会的発達 (心の理解、感情理解、問題行動) とどのように関連するのか検討を行う。現在、6歳時点のデータを収集中であり、結果については当日詳細なデータを報告する予定とする。

引用文献

Taylor, M., & Carlson, S. (1997). The relation between individual differences in fantasy and theory of mind. *Child Development*, 68, 436-455.